津和地の貯水トンネル

竹内康博氏は、以前紹介したように、墓地の法律問題の専門家である。愛媛 大学赴任後、県内の墓地調査を精力的に続けている。その先生が、フィールド ワークの授業で学生と一緒に、津和地島(温泉郡中島町津和地)へ調査に行く というので、私もついていくことにした。

一行は、ふくみ旅館に宿をとった。ここに二泊して全島の墓の年代調査と住 民の意識調査をするとのこと。昼食もそこそこに、学生たちは出かけて行った。

当日、島では敬老会が開かれていた。たくさんのお年寄りが公民館に集まり、 子どもたちの演技や踊りに歓声をあげていた。公民館の横には「史蹟お茶屋跡」 の碑があった。松山藩直営の公儀接待所の跡だそうだ。かつては随分賑わった ことだろう。

この島でいささか驚いたことが、二つあった。ひとつは、旅館の主人から「地下にトンネルが出来てから、水には困らなくなった」と聞いたことだ。忽那七島が、水不足に悩んできたことはつとに聞いていた。といっても、周囲わずか七・七キロのこの島に溜め池をつくる余地はなさそうだから、地下に貯水施設を作ろうという話は理解できる。ジュール・ヴェルヌの『地底旅行』に出てくる地下湖のようなものかと想像したが、それがトンネルというのは、どうしても頭の中で像を結ばない。

竹内先生と現場に行ってみることにした。津和地小学校から少し山手へ上ると、浄水場と小さな建物があった。ここがトンネルの管理塔らしい。ようやくここへきて理解できた。前後を閉じた巨大かつ長大なパイプ様のものが地中を横断しているのだ。全長六三九メートル、貯水量一万立方メートルで、二百四十所帯(六百八十人)の五十日分の水が溜められるのだそうだ。

宿に帰ってから「この島の歴史について記した書物はありませんか」と尋ね、 『神和三島誌』を見せてもらった。この冊子の中に、旧神和村出身のただ一人 の県会議員として、祖父矢野倉市の写真と記事が掲載されていた。